



3.11

ユースCafe

2022年度活動報告書



東日本大震災から12年
被災・県外避難した子ども・若者の今

認定特定非営利活動法人
レスキューストックヤード



独立行政法人福祉医療機構
社会福祉振興助成事業

はじめに ～活動の経緯～

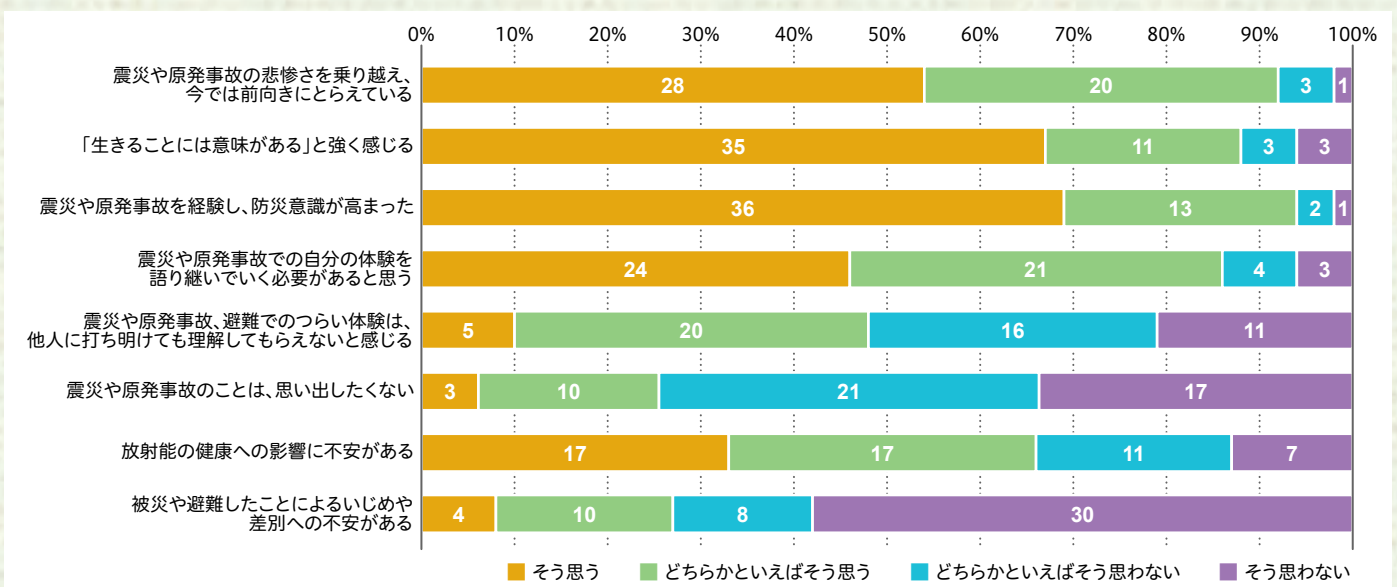
2011年に発生した東日本大震災および原発事故により、東北3県や関東地域から愛知県・岐阜県・三重県に避難された方は、2012年のピーク時で約2,100人、2023年時点でも約1,050人に上っています。原発事故の影響も大きかったため、避難世帯は子育て世帯が多く、愛知県の場合、震災当初小学生以下だった年代が避難者全体の30%も占めています。親の苦渋の決断によって友人に別れの挨拶ができないまま急な避難を余儀なくされ、避難先が変わる度に転校するといったことは、子どもたちにとって大きな負担となりました。震災の経験からPTSDの症状が現れる子どももあります。当事者として、避難先の学校や友人に震災の感覚を理解してもらえないことや、中にはいじめを受けるなどの辛い経験をし、震災や避難について口を閉ざす子や不登校になる子もいます。しかし、こうした実態は殆ど知られていません。

このことから、RSYでは、東海3県に避難した高校生・若者を対象とした調査を2021年に実施。アンケート回答者52人のうち6人が「避難後の暮らしで嬉しかったことはない」と答え、「震災を思い出したくない」という回答は2割強と、支援の必要性が高い若者がいることがわかりました。その一方で、「震災前にいた地域の現状を知りたい」は9割、「自分の経験を伝えていく必要がある」は8割強あり、震災を忘れて欲しくない、知って欲しいという想いや、自分のいた町や被災地の復興への関心が高いことも明らかとなりました。また、実際に震災を振り返って自分の経験や想いを語ってくれる若者もでてきています。ヒアリング調査に協力してくれた若者たちは、幼少期に当たり前の日常が一変し、学校や暮らし、家族のことなど様々な不安や悲しみがあつた一方で、前を向くにはそれを受け止めてくれる周囲の理解者の存在が大切であつたと教えてくれました。子どもたち自身が成長した今だからこそ、震災に向き合い経験を活かしていけるような場や機会が必要とされています。

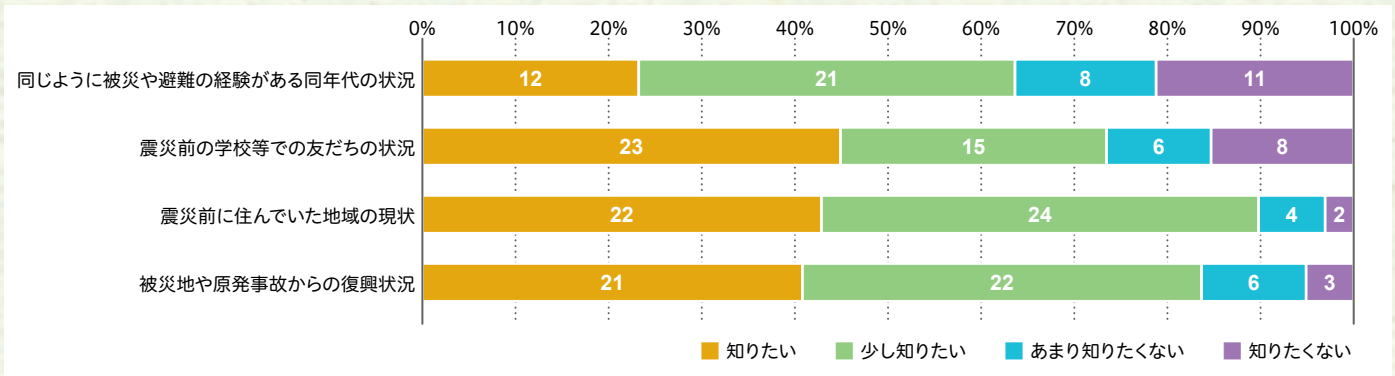
※参考：「311県外避難者について考えよう ～東日本大震災を経験した高校生・若者アンケート調査結果報告書（2021年/ Yahoo! 基金 被災地復興調査助成プログラム）」より

QUESTION

あなたの現在の心境について教えてください。



あなたは以下について知りたいと思いますか。



活動概要

令和4年度社会福祉振興助成事業の助成を受けて、若者当事者と一緒に、震災について気軽に話し合える「語り合いの場」、東北の被災地の現状を知る「東北交流ツアー」、若者当事者の体験談を伝える「伝える集い」を実施しました。

避難した若者当事者の「語り合いの場」

- 被災・避難当事者の若者同士や震災に関心のある若者が集い、震災や避難、お互いの状況などについて気軽に話し合うことを通じて震災と向き合い、共に学び合うきっかけとすること。当事者の若者が主体となり、震災の経験をどのように活かすことができるか、共に考え行動していけるようなきっかけ作りを目的に実施しました。
- 開催日：9月13日（火）／9月15日（木）／10月13日（木）／11月9日（水）／11月27日（日）／12月14日（水）／12月28日（水）／1月11日（水）／2月1日（水）／2月8日（水）／2月23日（木・祝）／2月28日（火）／3月1日（水）／3月29日（水）
- 開催方法：オンライン、リアル、オンラインとリアルのハイブリッド

東日本大震災被災地への「東北交流ツアー」

- 東海3県に避難した若者当事者が、自分たちが震災時に暮らしていた地域の現状を知ること。東日本大震災の被災地で復興まちづくりに関わる若者や地域の人々との交流を通して、次世代を担う若者達の地域コミュニティの中での役割を学ぶこと。それらを通じて、自分たちのこれからについて考えるきっかけとすることを目的に実施しました。
- 開催日：3月10日（金）～13（月） 3泊4日
- 訪問先：岩手県陸前高田市、宮城県石巻市・七ヶ浜町、福島県南相馬市・浪江町・双葉町・大熊町・川内村

被災・避難した若者の経験や現状を「伝える集い」

- 東海3県に避難した若者当事者の現状を伝え、当事者の子どもたちへの支援への理解や協力者を増やしていくこと。子ども時代に被災や避難を経験した若者世代から、震災を経験していない同世代や東日本大震災を知らない子ども世代等に対して、経験や教訓を伝えていくことを目的に実施しました。
- 開催日：8月23日（火）／11月13日（日）／12月4日（日）／12月11日（日）
- 開催方法：オンライン、リアル、オンラインとリアルのハイブリッド

語り合いの場「3.11ユース Cafe」

被災・避難当事者の若者同士が集い、震災や避難、お互いの状況などについて気軽に話し合うことを通じて震災と向き合い、共に学び合う場を2022年9月から月1～2回開催しました。コロナ禍もあり、殆どがオンライン開催となりましたが、状況に応じてリアル開催も実施。当事者の若者たちと意見交換していく中で、「放射能について知りたい」「語り部から話を聞きたい」「避難所を経験していないため、避難所生活の実態を知りたい」という意見もあり、震災に関する学習会の開催にもつながっていきました。

リアル交流会 11月27日(日)

オンライン交流の中で、「リアルでも集まりたい」という声を受け、名古屋都市センターに6名が集いました。自己紹介では、東北の地図を広げ、震災当時に住んでいた地域のことや、震災当日のこと、避難・移住してきたときのことなど、それぞれの経験を共有しました。殆どの参加者がお互い初めてのリアル対面でしたが、顔を合わせて話すことで、自然と会話が弾み親交を深めることができました。語り合う場が、それぞれの想いの発信や新たな取り組みのきっかけづくりにつながっています。

グループワーク「みんなでトーク」での意見

①被災や避難をした子どもの当時、大変だったことや悲しかったことは？

- 被災地：「とにかく余震が大きいし不安だった」「避難所で泣いてる赤ちゃんに怒鳴るおじさんがいて怖かった」「福島でのマスク生活。福島の食べ物、飲み物は避けた」
- 避難生活：「一時避難の時、慣れない場所での生活で、仲良しのいところであっても一緒に住むのはまた違うものがあった」「今後が見えない不安、説明不足。親に何も説明されないまま他県へ転々と移動したから大人への不信任」
- 避難・転居先：「都会の雰囲気になじめなかった」「方言を言ったらバカにされた」「宮城県内で内陸に引っ越したが、津波被害を受けた沿岸部との温度差を感じた」
- 学校・友だち：「引っ越し度に学校の勉強が遅れる」「学校によってルールや文化が違う」「愛知に来てからの交友関係。人見知りしてしまうため、なかなか馴染めなかった」
- 家族：「ひいおばあちゃんが、避難中しきりに「帰りたい」と悲しんでいたのがかわいそうだった」「(他県への避難で地元に残る)おばあちゃんたちと離れることになった」「馴染めない土地でお母さんが弟を出産」
- その他：「震災大変だったの？」は何て答えればいいのか分からない。出身を聞かれて東日本大震災で引っ越して来たと言うと、同級生たちから「大変だったね」と言われた。大変だったのはお母さんなのにな…」

②震災について知っておいて欲しいこと

- 「被災者」といってもそれぞれ異なる経緯なので、ステレオタイプ化せずに捉えて欲しい。
- ちょっとした揺れでも怖い。警報音とかもすごく怖いからトラウマ。軽く扱わないで欲しい。
- 3.11は現実だぞ！自分の命以外を捨てる覚悟を！
- つながりを大切にしてほしい。大切な人には常々その大切な気持ちを伝えるべき。

③知ってもらうために、どんな機会があるといいか

- 自分の体験が貴重であると同時に、他人の経験も貴重なので、話を聞き合う場は大切！
- 大変だった、辛かったことを伝えていくことはとても大切。でもポジティブなことと一緒に伝えていけるといい。
- アートやマンガ、動画など、フィクションでも創作物には人の意識を動かす力があるのでは。人に見てもらい考えてもらう。でも、当事者や専門家なしで作られたフィクションは嫌だ。
- 対面での語り部。コネや経験がなくても伝承活動はできる。そのきっかけを作っていきたい。



東北の地図を広げて自己紹介

語り合いの場「学習会」

学習会の第1～2回は、「ツアーで原発の近くにも行ってみたいが、放射線について知らないため不安。危険性をちゃんと勉強してから現地に行きたい」「放射線に関しては、専門家でもいろんな意見がある。どちらの意見も聞いてみたい」という声から、放射線に関する学習会を実施しました。一人ひとりが、放射線に関する自分の判断や意見を持てるよう、原発事故のこと、現在の汚染状況、健康への影響等について多様な視点から学び、考える機会になりました。第3回学習会は、「震災遺構を見に行きたい。語り部の話も聞きたい」という声から、震災遺構や伝承に関する取り組みを学ぶ学習会を実施。被災・避難当事者として、伝えていくことの大切さを学ぶ機会になりました。

第1回 学習会

日時：2022年12月14日（水）

講師：河田昌東氏（特定非営利活動法人 チェルノブイリ救援・中部）

内容：原発事故の経緯や放射性物質の種類と特徴、汚染の広がりや事故当時の風向きや降雨の気象条件が重要であることなどを、根拠となるデータをもとに解説。海洋放出が予定されている汚染水（処理水）の問題や小児甲状腺がんの問題についても、海外の事例や国のデータからの検証をかみ砕いて説明いただきました。また、チェルノブイリ救援・中部では、南相馬市での汚染マップづくりや内部被ばく低減のための野菜の放射能測定などの活動をしており、実際に自分たちで測って確かめることの重要性を学びました。



第1回学習会スクリーンショット

参加者からの感想

- 当時は小学生で宮城県に住んでいて、福島原発事故はニュースも全然理解できなかつたし、自分事という感じがあまりしなかつた。今日の学習会でゼロから知ってとても勉強になった。今も問題が続いていて、本当に終わりが見えない感じがしてちょっと怖くなった。
- 南相馬出身で、原発事故で岐阜に避難した。当時は小学生で放射線は身近ではなく、全然わからないことばかりで、この間勉強してきた。河田さんのお話で、トリチウムは物理的に分けることができるということにとっても興味を持った。いろんな解決の糸口が知れて良かった。
- 当時は小学1年生で福島市に住んでいた。放射能については漠然と怖いものっていうイメージしかなく、今までちゃんと知ることもないままだったので、この機会に知識がつけられて良かった。母も心配している部分があったので、伝えたいと思う。

第2回 学習会

日時：2023年1月11日（水）

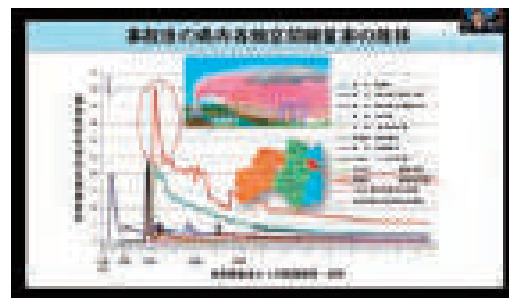
講師：佐藤久志氏（福島県立医科大学 保健科学部 診療放射線科学科 准教授）

加藤絵美氏（農業生産法人 株式会社カトウファーム）

内容：福島県が行っている「食と放射能に関する説明会」を学習会として実施。福島県立医科大学の放射線科医から、データを示してもらいつつ、外部被ばくや内部被ばくと健康リスクについて説明いただきました。また、リスクに遭遇した時に、専門家の話を信じ込むのではなく、自分で考えて答えを出して行動することが大事であると伺いました。福島県内の農家さんからは、母親としての葛藤もあった中、福島で農業を継続することを決断したこと。福島農家への批判の声もある中、お米の放射性物質の吸収抑制対策や全量全袋検査に取り組むだけでなく、世界基準の農業認証であるグローバルGAP認証を取得していること。福島農業を広めるための団体を立ち上げ、国内だけでなく海外でのPR活動をしていることなど、チャレンジを続けていることを伺いました。

参加者からの感想

- 自分が危ないと思っていたところが、意外と線量の数値が低くて驚いた。漠然と危険に思っているところが自分にはあったんだと思った。これからはしっかりデータとかも見て、自分でよし悪しをしっかりと考えて判断していきたい。
- 風評被害を助長するようなことを言われて辛い思いをしたというお話を聞いて、すごく嫌な気持ちになった。でも、取得が難しいと授業でも習ったことのあるグローバルGAPを取得していてすごいと思った。カトウファームで製造している地ビールも飲みに行きたい。
- 大学で法学部に在籍しているため、風評被害に対する訴訟問題がどうなっているのか気になった。具体的な損失の特定が難しく訴訟として扱われづらい問題かと思うが、それに対応する社会のシステムもできてきていると勉強している。もっとこの問題について深く知りたいと思った。



第2回学習会スクリーンショット



第2回学習会スクリーンショット

第3回 学習会

日時：2023年2月8日（水）

講師：山崎麻里子氏（一般財団法人 3.11伝承ロード推進機構）

内容：全国の災害を語り継ぐ取り組みから、東日本大震災の被災各地の震災伝承について解説いただきました。どの伝承施設も命を守るためにどうすればいいかを考えるきっかけの場所である一方、伝えていることや人々の想いはそれぞれ違うため、その背景を深く知る事の大切さを教えていただきました。また、釜石東中学校の避難訓練や、過去の災害で建てられた「ここより下に家を建てるな」という石碑によって被害を免れた「活かされた教訓」があった一方で、別の地域では命を奪う結果となってしまった事例、マニュアルにとらわれない判断が必要であった事例の紹介から、教訓やマニュアルが命を救うのではなく、それらから学び、自分で判断して命を守る行動をする力が大切であると学びました。

参加者からの感想

- 当時は宮城県に住んでいた。成長してから見る東日本大震災が違うなと感じている。私の家は、津波被害はなかったが、小学生の時、東日本大震災に関する自由研究で、津波のあった地域を実際に見に行ったりもしたことがあった。でも今回の学習会で、こんなに恐ろしいことが起きていたんだと、住んでいたのに知らなかったことがたくさんあったことがわかった。
- 地震がトラウマになっていて、ちょっと大きい地震があると不安になる。一方で、当時中高生だった人や今の中高生が、語り部をしていることが、すごく勇気ある行動だと驚いた。普段の避難訓練で使っていた施設が大きな被害を受けたことが印象的で、絶対がないということが大事になってくると勉強になった。
- 被災地の人たちが、悲しい体験で終わらせないように、前向きな気持ちで次につなげるために伝承活動に取り組みされていることを知れてよかった。伝承と観光を一緒にしているところも多いと聞き、いいなと感じた。気仙沼市の向洋高校では、若者たちが伝えたいという気持ちをもって語り部をしていることを知り、私も伝えていくことが大事だとこれまでの機会を通して思っているため、そういった話が聞けてよかった。



第3回学習会スクリーンショット

東北交流ツアー

岩手県陸前高田市

高田松原津波復興祈念公園内を住民ガイドの案内で回り、津波被害の実態と教訓を学びました。また、津波の被害を受けてもなお、海と共に生きる地元漁師の方との交流を通じて、陸前高田の今を体感しました。

※協力：一般社団法人マルゴト陸前高田、一般社団法人長洞元気村、NPO法人いわて連携復興センター

3月10日

(金)

ツアー1日目



防潮堤上の献花台。奇跡の一本松を残し、震災で約7万本の松が流出したが、新たに植樹された松の苗木が育っている。

ガイドの言葉

「防潮堤は津波を防ぐのではなく、町の人々が避難する際の時間稼ぎのためにある」

参加メンバーコメント

高田松原津波復興祈念公園

- 私の記憶にある震災前の東北の沿岸は、松が一面に植えられていました。震災で松が持ってかれて、記憶とは全く違うものになってしまいました。しかし、植樹された松が成長してる様子を見て、震災前を思い出して懐かしくなり、少し嬉しくなりました。海沿いにある松林を再び見られる日が早くきて欲しいです。
- 津波復興祈念公園は、道の駅が併設されており、震災から立ち直り元気である姿を発信できるようになっている感じがしました。

旧気仙沼中学校（震災遺構）

- 旧気仙沼中学校では、天井にぶら下がった椅子や瓦礫が残っていて、跡形もなく日常が奪われていったことを実際に見ました。テレビ、新聞などでは体験することができない12年前の現実を目の当たりにして、鮮明に胸に残るものがありました。
- “リアル”の強さ、震災遺構の物体としての重みを感じました。私は現代アートに携わって、色々な作品を鑑賞して、自分でも作っています。そんな中で、物質性として被災地にある物体たち、そしてそれを守り続けている人たちの存在の強さは、人工物でありもはや人工物を超えた驚異をも感じました。

ガイドのお話から

- 亡くなった息子をなでながら「見つかったよかった」と呟いた女性の話に心が締め付けられました。最愛の家族が亡くなってしまって、でも見つかっただけよかったと思える状況が、私には想像できません。
- 災害時に助けが必要な方たちのためにしてあげたいことはたくさん出てきても、支援物資が追いつかなかったり、外との連絡手段が途絶えてしまったりと、予想だにしないことが次々と起こっていたということを聞いて、今そうになったら自分は落ち着いて動くことが出来るのだろうか、助けが必要な人たちのために私たちだからこそできることもあるのではないかなと、色々なことを考え直すきっかけになりました。



震災遺構の旧気仙沼中学校。3階建ての校舎は全壊したが、生徒と教職員は高台に避難したため全員無事だった。



長洞元気村でのわかめの芯抜き体験。気さくな地元のお母さんたちから、高田のワカメ養殖や震災体験談を伺った。

協力者からのメッセージ

いわて連携復興センター
富田 愛さん 菅原 香織さん

今回は東海地方から岩手県陸前高田市にお越しいただきありがとうございます。
みなさますでにご存じかもしれませんが、名古屋市と陸前高田市は、東日本大震災を契機として友好都市の協定を結んだ市になります。この機会に東海地方から震災学習でみなさまが来られたことにとっても強いご縁を感じました。また千葉ロッテマリーンズに所属の佐々木朗希選手も陸前高田市出身で震災を経験し今は日本、WBCでは世界を相手に活躍する選手になっています。当日は、津波ガイドによる伝承や地元のお母さんたちとの交流など短い時間でしたが自分自身の目で見て、触れて、感じた東北の「今」を今住んでいる周りの人たちにも伝えていって欲しいと思います。

今回は東海地方から岩手県陸前高田市にお越しいただきありがとうございます。

みなさますでにご存じかもしれませんが、名古屋市と陸前高田市は、東日本大震災を契機として友好都市の協定を結んだ市になります。この機会



長洞元気村にある津波で全壊した母屋を修復した震災伝承拠点。2階の天井まで津波が到達している。

宮城県石巻市

石巻市南浜地区出身のメンバーから、当時住んでいた住宅跡地を起点に、通っていた門脇小学校（震災遺構）と避難した学校裏の日和山を案内してもらいながら体験談を伺いました。午後には公園内で開催された追悼イベントにボランティア参加し、キャンドルの設置や風船の配布を行い、14:46に黙とうを捧げました。

※協力：東日本大震災追悼「3.11のつどい」実行委員会、JCN宮城担当

3月11日
(土)

ツアー2日目



旧門脇小学校。1階が津波に襲われた後、火災にも遭った。津波火災の被害を伝える唯一の震災遺構。児童は避難して無事だった。震災遺構にする際に、校舎の両端を解体している。

ガイドの言葉

「当時は2年2組。自分の教室は被害が一切なく、解体されてしまった。いろんな住民の声もあるが、自分の本音としては残して欲しかった」

参加メンバーコメント

門脇小学校（震災遺構）、日河山

- 門脇小学校の火災と津波の話がとても印象的だった。展示で黒板があったのだが、津波が来ている部分は錆びておりそこから上は錆びてない境界線のようなものになっており、視覚でここまで津波を感じたのは初めてだった。
- 地元ではあったが内陸の方だったため、知らないことが多いと改めて思った。地震、津波以外にも火事の被害もあり、また違った辛さを感じた。
- 日河山に実際に自分の足で登ってみると、かなり急で長い道のりだと感じました。小学校低学年の児童や、高齢者の方々が登るには厳しかったと思います。避難場所があるだけでなく、そこまでの道は安全か、誰でも避難できるルートであるかの確認も大切であることに気がつきました。

石巻南浜津波復興祈念公園、追悼イベント

- 祈念公園はとても広く、きちんと整備された綺麗な公園でしたが、そこには今も、震災前に住んでいた方の暮らしがあり、たくさんの想いがつまっているのだと感じました。
- 当時5歳の妹を亡くした遺族代表の女性の話を聞いて、12年経った今でも苦しみ続けている人がいることを実感しました。どうしても他人事にはか捉えられなかったことが、実際の声を聞くだけで、ここまで身近に感じられるのだと思ったので、言葉で実際に伝えたいです。

ガイドのお話から

- 3.11関連の全ての震災遺構や慰霊施設を総括する場となる公園が作られた地域であるのにも関わらず、南浜の人間で語り部をしている者は片手におさまるほどです。あそこの震災前を伝える人も機会も少ないため、語り部ガイドの時間を頂けて案内できたこと、大変嬉しく思っています。
- 石巻の岩倉くんの震災ガイドでは、一つひとつの言葉に自然災害がもたらす津波の怖さ、悔しさが表れていて、語り部を行い、若い人たちに継承していかなければならない力強さ、石巻の過去と現在を知ってもらい、伝えていきたいという行動力に感心し、聞き入ってしまった。どれだけ人々の心を動かすものであったのか、語りを通して一層理解も深めることができたと思う。



震災前の街並みの模型を見ながら体験談を伺う。



震災時に児童や住民が避難した日河山から見た景色と長い階段。

ガイドの言葉

「津波の押し寄せる音が怖かった。爆発したみたいな音と衝撃でびびってしまった。山が崩れるんじゃないかと思った」

協力者からのメッセージ

JCN宮城担当
三浦 隆一さん

3月11日に門脇でみなさんと一緒に過ごした後、私は女川に向かい、震災で息子さんを失ったご遺族の方と一緒に追悼の時間を過ごしました。東日本大震災では失われた命の数だけ教訓があります。真摯に教訓を学ぶみなさんの姿を見て、これから起こる災害において未来の命が失われないよう、私自身が「もっと頑張ろう」とエネルギーをもらえました。みなさんもこれからは伝承者です。共に伝え続けていきましょう。



かつては人々の暮らしがあった追悼の場。黙とうをした後、風船を上空に飛ばし、鎮魂を祈った。

宮城県七ヶ浜町

宮城県七ヶ浜町は、東日本大震災直後から2021年3月までRSYが支援に入った町です。町には、震災の伝承活動をしている若者グループ「きずなFプロジェクト」があり、メンバーの震災体験をもとに自作した紙芝居などによる語り部活動について学び、同世代の交流を深めました。

※協力：きずなFプロジェクト、^{てらこや}地球子屋、七ヶ浜町



きずな公園は見晴らしがよく、七ヶ浜の海が一望できる。看板は当時の七ヶ浜町の子どもの手形を使い、「きずな」を表現するデザインになっている。

参加メンバーコメント

きずな公園、きずなハウス見学

- 震災で遊ぶことのできない子どもたちに、子どもたちの想いを聞いて公園を作り、子どもたちが欲しい遊具が揃っていて、とても楽しそうだった。
- きずなハウスでは、津波に関する資料や絵本、被災時に役立つ情報がたくさん展示してあって勉強になりました。案内してくれた方がとても元気で、こちら側も元気をもらいました。



町の交流施設であり、RSYの七ヶ浜拠点であった「きずなハウス」。住民の想いで震災に関する手づくりの展示が実施されている。

あいち・きずなFプロ大交流会

①七ヶ浜町長挨拶

- 震災当時の行政側の視点から、やること一つひとつが手探りで、初めて直面する問題やトラブルを聞くことができた。自分たちの知らないところで頑張っていたことを聞いて、特別な話を聞くことができたと感じた。また今回の経験を活かして、個人だけでなく今住んでいる町の行政などにも働きかけていきたい。

②きずなFプロ活動紹介、交流タイム

- 交流会では新たな輪が広がりました。出身も大学も違う人たちと話すのは新鮮でした。きずなFプロの方々の紙芝居ではとても考えさせられました。何があっても家に戻っては行けないという教訓を改めて実感しました。
- 語り部における18・22問題（高卒と大卒のタイミングで辞める人が多い）について、進行形で抱えている方々と話し合えたことは大きな収穫でした。
- 自分自身の体験を伝えることは大切だし、テレビや新聞で見聞きするのと、実際の声を聞くのでは感じ方に大きく違いがあるように思われました。より身近に感じられました。東日本大震災の経験を活かして、南海トラフにはどう対応したらいいのか、今後どうするかを考えていく必要があると思いました。

協力者からのメッセージ

きずなFプロジェクト
サブリーダー
若生 遥斗さん

3月は七ヶ浜にお越しくださり、ありがとうございました！すごく楽しい時間を過ごさせていただきました。当日はきずなFプロとして初めての試み

であるガイドをしたり、久々に活動に参加するメンバーもいて、不安な部分もありましたが、七ヶ浜の人の良さだったり、震災に対しての心構えを知ってもらえていればいいなと思います。きずなFプロメンバーが愛知に行って交流したり、講演だけだと壁があるので、3月のような感じで交流会という形でやってみたいなと思いました。そして、次七ヶ浜に来る機会があれば、また交流会しましょう！また会える日を楽しみにしています！



震災の教訓を伝える「きずなFプロジェクト」手作りの紙芝居。小学校や幼稚園などでも活動し、震災を知らない世代へ命の大切さを伝えている。

ガイドの言葉

「震災学習として、七ヶ浜の人から体験談を聞いたりしている。私のように被災経験がなくても、聞いたことを話すことでも語り部になると思う。皆さんも家族や大切な人のために、言葉を通して語り部になって欲しい」

福島県双葉町・大熊町

3月12日
(日)

ツアー3日目

時が止まったまま手つかずとなり、朽ちて荒廃した住居や田畑を車窓から見ながら原子力災害伝承館を見学し、原発事故について学びました。また、大熊町内をバスに乗って地元住民ガイドの案内で回り、町の歴史や原発事故被害の現状、新たな取り組みについて学びました。

※協力：大熊町町民有志、社会福祉法人大熊町社会福祉協議会、株式会社ネクサスファームおおくま、JCN福島担当

参加メンバーコメント

原子力災害伝承館

- 福島出身のメンバーからの説明を身近に聞くことができたので良かったです。原子力を稼動するとなった時に、学校の教育では原子力発電は素晴らしいものという教えをし、そのリスクに関しては説明しないということをしてきたと知り、何とも言えない気持ちになりました。実際に住めなくなってから原子力発電の恐ろしさを知った住民も少なくないと思います。町の資源や財政の潤い、それに伴う住民らの生活を考えると、原子力発電は良くないといった声がかき消されることもあると思います。福島に関しては原子力発電をやめたら全て解決するとは思えず、闇が深いと感じました。
- 若い世代のみんなが原子力や放射線について知り、考える姿が一番記憶に残ってます。今までの経験で自分らの世代の人が原子力や放射線について知ろうとしている姿を見たことがなかったので、とても感動しました。

大熊町見学バスツアー

- 避難指示区域は震災が起きたときそのまま、そのままの状態が残っていた。ほとんど復興が進んでいなくて、想像より遥かに状況は厳しいのだと感じた。地震で壊れた建物だけが残り、人がどこにもいない、不気味な雰囲気があった。
- 帰還困難区域を見たのは初めてでした。放射線測定器がずっと鳴り響く車内は、原子力の恐ろしさを体感する空間でした。今も放射能を取り除く作業が毎日行われていると知り、震災から12年経った今でも復興はしていないと考えさせられる現状を見ることができました。家は見えているのに、見えない放射能の壁によって帰ることができない人の気持ちを考えると胸が痛くなりました。

協力者からのメッセージ

JCN福島担当
北村 育美さん

東北の被災地に足を運んでいただき、ありがとうございました。まずは、みなさんの率直な疑問や気づきに若くはいいなと思えました！被災地は日々変化しています。人々の心も同様です。ぜひまた足を運んでもらい、その変化を感じてください。何度も言われていることかと思いますが、被災地の現状を知ることはもちろんですが、被災地で起きていること、その課題を自分ごととして捉え、行動してみてください。

いることかと思いますが、被災地の現状を知ることはもちろんですが、被災地で起きていること、その課題を自分ごととして捉え、行動してみてください。



伝承館に展示されている除染廃棄物などを詰める「フレコンバッグ」。除染廃棄物は、中間貯蔵施設で最長30年保管される。



町内には崩れたままの家が残っている。



帰還困難区域はバリケードで立ち入りを制限されている。

ネクサスファームおおくま

- ネクサスファームおおくまでは、イチゴを放射性物質の検査機に通して、今まで一度も基準を超えたものはでていないという説明を聞き、嬉しく思いました。イチゴおいしかったです。
- 最先端の技術を使ってイチゴを生産していることが印象的だった。おいしいのに安価でたくさん入ったイチゴが魅力的で、また食べたいと思った。



イチゴ栽培・販売会社「ネクサスファームおおくま」の工場見学。最先端技術を使った生産、放射性物質の全量検査がされている。おいしいイチゴに参加者も大満足。

大熊町・松永秀篤さん体験談

- 松永さんの話を聞き、この場所が好きと言っていたのが印象的だった。これだけの被害が出て、人も景色も変わり、イメージも良い印象を持たれない時もある。それでも戻ってきたのは松永さんがこの場所が好きだからと言って、人や景色が変わってもこの場所にいる安心感というのがあるんだなと思った。
- 現地で暮らしている方のお話をたくさん聞き、自分（自分の家族）がした選択について考えさせられました。彼らは震災後の何年も自分の土地を取り戻すために苦勞し、その後は愛着を持って暮らしています。一方で私は、災害危険区域に指定されたとはいえ、簡単に別の市に移り住み暮らしてきました。当時は幼かったので自分で考えることはできませんでしたが、それでも、地元の復興を見捨てて逃げたのではないかという念を感じてきました。その背景には、家が残っているかいないかがキーポイントになっているのではと考えました。私の家は全て無くなり、土台だけになりました。原発事故の区域の方々の家は残っているケースの方が多いです。「物」の被害でいえば、圧倒的に私の方が上です。しかし、家があるのに行けないというのは、失うことよりも悲しいことであると改めて痛感しました。「心」まで含めた被害でいえば、ましてや人災なのですから、原発事故の被災者の悲しみは、津波被害の被災者のはるか上をいくものだと思います。



松永さんが先祖代々から受け継いだ土地は、中間貯蔵施設のために手放さざるを得なかった。熊川地区の伝統芸能「熊川稚児獅子舞」の伝承にも取り組まれている。

福島県南相馬市

旅館を経営する小林夫妻は、震災当初は愛知県内に広域避難されましたが、2012年に南相馬市の避難指示区域外の仮設住宅に入居。健康不安などの心配を抱え、それでも南相馬でどう暮らしていけるか、チェルノブイリからも学びながら放射能汚染と向き合い続け、避難指示解除後に旅館を再開されています。女将から体験談を伺いました。

参加メンバーコメント

双葉屋旅館・小林友子さん体験談

- またこの地で頑張っていこうという強い意志や、本当にこの場所が好きなんだなと感じられるようなお話を聞くことが出来て、あたたかくて素晴らしい方だなと感じました。
- 小林さんの「少し外に出れば、(津波から)助けられた命があったかもしれない」という言葉が印象に残っています。被災した方々は未だに「助かってしまった」という罪悪感とプレッシャーの中で生きているのだなと感じました。本来生きていることは何よりも大切に素晴らしいことであるはずなのに、その事実によって苦しんでいる人がいることに辛くなりました。心のケアが難しく、安易に声をかけられないことがまた心苦しいです。
- 福島の現状が知れた。福島の復興はとても時間がかかりそうで、できることを少しずつやっていくしかないのだと思った。



「避難している時は、どこに行っても楽しくないし、何を食べても味もなかった。」「震災の資料はあるけど人々の証言がなかった。10年の歴史をちゃんとまとめたくて、発信していくべきだなって。小高に帰ってきた人にインタビューして映像として残していつている。」

福島県川内村

高校生の時に震災と広域避難を経験し、2023年春に故郷の川内村でカフェ&ギャラリー「秋風舎」をオープンした志賀風夏さんしゅうふうしやから体験談を伺いました。震災によって故郷を思う気持ちが強くなり、復興を進める村の力にもなるために、川内村の魅力や文化を発信している志賀さんと、同世代同士の交流を深めました。

3月13日
(月)

ツアー4日目



古民家を改装したカフェ「秋風舎」。「川内村にはまだ古民家を立て直せる大工さんがいる。その人たちのすごさを知って欲しくて、土壁塗りは地元の子どもたちと一緒にしました。」

参加メンバーコメント

秋風舎・志賀風夏さん体験談

- 福島大学を中退した理由の一つに、「原子力災害はなくならないと思いますか?」という授業内容のもと、友人が「今もあるからなくならないんじゃない」といった言葉に傷ついたという話が印象的でした。今ある問題を「ただそこにあるから」という理由だけで簡単に片づけてはいけなさと感じました。
- 川内村に人を呼び戻そうとしていて、自分ではできないことだったので、とても尊敬しました。村のために何かできることはないかな?と考えることまではできても、実際に実現しているところが凄いです。ジンジャーエールもクラフトコーラもおいしかったです。
- とても雰囲気がよく、コミュニティスペースなのかなと最初思っていた。しかし、志賀さんは、「コミュニティスペースだと興味のある人しか集まってこない。カフェだと誰でも来られる。色んな人が気軽に語り合える場所にできたらいいな」と言っていた。川内村の人々が集まってきて、県外の人とも関わり合い、新しい心地よい居場所としての意味合いで村を活性化させようと奮闘されているように感じた。
- 川内村のマラソン大会にぜひ出てみたいと思った!参加者全員に(志賀さん手製の)陶器のメダルが貰えて、ランニング中に地元の方が手を振ってくれるのを想像して、とても楽しそうなマラソン大会だなと、今から参加するのが楽しみです。



陶芸家でもある志賀さんが作ったメダル。



おいしいと大評判のクラフトコーラ。

協力者からのメッセージ

秋風舎
志賀 風夏さん

今回は遠く川内村まで来てくださってありがとうございました。自己満足の世界かもしれませんが、たくさんの人達が、川内村だけでなく、自分の故郷を大切に改めて思えるように、家に帰れることがどれだけ恵まれているのかを気付けるように、自分への戒めも含めて秋風舎を作りました。皆様の中で今回の旅が福島を思い返すきっかけになったら嬉しいです。また会える日を楽しみにしています!

ツアーに参加し、今後やってみたいと思ったこと!

- 福島県でも地域によって震災に対する考え方の温度差があり、自分の周りの子たちは震災の時のことを覚えていないことが多いので、何か地元のためになることがしたい。
- 防災への働きかけをしたいと思います。いろいろな場で今回のツアーで学んだこと、感じたこと、考えたことを話したり、一番は行政に働きかけて防災への意識を強く持つように呼び掛けることがしてみたいです。
- 南浜地区の案内を、もっと他の若者を相手にしてみたいなと思いました。
- 私たちの聞いた話を、体験していない人や分からない人に伝えたい!
- 同じ福島県でも、私が住んでいた辺りのことしか知らなかったなので、今回のツアーで魅力がある東北の地をたくさん知ることが出来ました。もっと知りたいなという気持ちになったので、また違う場所にも足を運んでみたい。
- 避難生活の体験談を聞きたいなと思いました。当時困ったこと、欲しいと思った物やサービスなどに興味があります。



伝える集い

子ども時代に被災や避難を経験した若者世代から、震災を経験していない同世代等に向けて、防災イベントや震災の伝承イベントなどの場を通じて、一人ひとりの経験や想いを伝えていただきました。

RSY 災害ボランティア研修会

8月23日
(火)

RSYが実施した研修会の場で、災害ボランティアに興味のある人に向けて、小学5年生の時に石巻市で被災経験をした齊藤永那さんに体験談をお話いただきました。震災時に小学校で経験した地震の揺れの恐怖や、直後の混乱した避難所の様子などを語っていただき、学生参加者からは、「同年代の被災体験は初めて聞くことばかりで衝撃的だった」という感想がありました。齊藤さんからは、「体験談としてしっかり話すのは初めてだったが、自分が語ることで何かに役立つなら嬉しい」と話され、経験を伝えていただき、今後に活かしていく場の大切さを実感しました。



RSY災害ボランティア研修会

防災人材交流シンポジウム「つなぎ舎」

RSYが実行委員会の一団体として参加している防災人材交流シンポジウムに、小学2年生で福島市からの広域避難を経験した佐藤ららさんに登壇いただきました。原発事故後の福島の暮らしでは、放射線の健康への影響を心配し、福島県産の食べ物を避け、外出も控えるようになり、クラスメイトも避難のために転校していく子がいて生活が一変したこと。愛知に避難してからの暮らしでは、外出や食べ物のことを気にするストレスがなくなった一方で、学校に馴染むことに時間がかかり、学校での人間関係の悩みがあったこと。そして、父親は避難先での新しい仕事探し、母親も新生活にすぐに慣れず、家族みんなが不安定で大変だったことを話してくれました。それでも、友だちなどたくさんいい人との出会いがあったことへの感謝や、いい思い出もある福島ともつながっていたい今の気持ちがあること。同世代や震災を知らない子どもたちにも知ってもらえる機会を作ったり、被災地の将来のためにも、自分ができることをしていきたいと力強く発表してくれました。

同シンポジウムには、石巻市で被災した岩倉侑くんも登壇しており、名古屋にも岩倉くんのように震災の伝承者がいるため、震災を経験した当事者と直接会って話すことで災害を自分事として考えて欲しいこと。そして、そのことを周りにも広めて欲しいと、会場の同年代の学生たちに向けて語り掛けました。また、震災経験者に向けて、語り部デビューをして欲しいという思いも伝えてくれました。

11月13日
(日)



防災人材交流シンポジウム

3.11 ユースダイアログ

東日本大震災支援全国ネットワーク (JCN) 主催で、被災地で暮らしている若者や避難を経験した若者が、同世代の若者たちへの経験や想いの共有を通じて、できることを一緒に考える3.11ユースダイアログが開催されました。RSYは登壇者や参加者の調整など、企画運営の協力をしました。

12月11日には、国見町から広域避難を経験した矢井もも凜さんに登壇いただきました。震災後、母親から急に「愛知に行く」と言われた時には、その理由がわからずすぐに帰れると思っていたが、そのまま愛知の小学校に転入し過ごしていく中で、福島に戻れないと感じ取っていったこと。知り合いのいない愛知でのイチからスタートで、味方は親のみの寂しい日々を過ごしてきたと話されました。また、小学校の友人には震災の話はできず、誰にも言えない思いを抱えて震災を憎んでいたけれど、高校では東北のボランティア活動も行っている部活に入部し、震災について話す機会が増え、振り返ることができたこと。現在は災害現場へ駆けつけられる看護師になりたいと、10年の想いの変化と夢を話してくれました。

12月4日(日)
12月11日(日)



3.11ユースダイアログ

事業成果の考察

「東日本大震災とは？」と尋ねられても、簡単には説明できない。被害の概要なら検索すればすぐ出てくるが、数字ではあの凄まじさの実態は伝えきれない。あれから12年が経過し、ますます風化が進む中で、この事業が果たした成果は、「若者」「現場」「活かす」というキーワードで整理できよう。

「若者」 今回の参加者は、実際に震災に遭遇した者、放射能を回避し県外へ避難した者、報道の記憶はあるがこれまで特に無関係であった者らで、この組み合わせ自体がそもそも貴重である。まずは瞬間的に全員が仲良しになれることに感心。「自分の経験を直接伝える貴重な機会となった」「現地で活動している同年代から刺激を受けた」「ただただ驚きの連続」などの感想から、抜群の行動力や吸収力を感じた。震災当時は全員小学生であったが、まさに自分の意思で人生を歩む年代になった今、この体験はそれぞれの生き方・考え方の選択肢を拡げることにつながったと思う。

「現場」 震災から12年の被災地であっても、震災遺構は見る者を凍らせ、語り部が生々しい現実を伝える。特に「帰還困難区域」が続く福島県大熊町で、車窓から目に飛び込んできたバリケードとその奥の廃墟と化した家々には、原発事故の影響は現在進行形であることをまざまざと見せつけた。福島県出身の者でさえ「初めて見た」驚愕の事実に、心が締め付けられた。一方で、そこで暮らす方々の生の話を聞くことで、望郷の念やふるさとの復興への思い、そして多様な生き様や人間の逞しさも学んだ。やはり現場に勝るものはない。

「活かす」 実際に震災に遭遇した者の中には、自らの体験を基に「もっと伝えたい」「地元で活動がしたい」と、他の者も「特別な経験だった」「もっと知りたい、聞きたい」という声が多い。こう思った背景は、やはり東日本大震災の風化に危惧する気持ちと、次の災害に活かす必要性を感じ取ったからであろう。この地域も南海トラフ地震への警戒が叫ばれ、決して他人事ではない。津波からの早期避難や備蓄など、いわゆる防災面からの教訓に加え、避難者を含む被災者それぞれ境遇は違うこと、いのち・暮らしを守るためには「つながりが大切だ」という人間愛や人の尊厳の重要性にも認識を深めた。

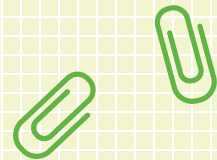
コロナ禍での行動制限が緩和され、まずは本事業が実施できたことは幸いだった。何よりお世話になった訪問先すべての方々にとっても歓迎されたことに感謝したい。震災当初、声もかけられない状態だった被災者が、若者を前に生き生きと話しをされる姿を見て感動すら覚えた。今後、成長著しい若者たちが、どのように具体的な行動に移していくかが楽しみである。

認定特定非営利活動法人レスキューストックヤード
代表理事 栗田暢之



東北交流ツアーのひとこま





認定特定非営利活動法人 レスキューストックヤード

〒461-0001 愛知県名古屋市東区泉1-13-34 名建協 2階

TEL 052-253-7550

FAX 052-253-7552

Mail info@rsy-nagoya.com

Web <http://rsy-nagoya.com/>

Facebook [rsy.nagoya](https://www.facebook.com/rsy.nagoya)

Twitter [rescuestockyard](https://twitter.com/rescuestockyard)



独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業